

《企画書》

提出者 おかもとまり

【タイトル】なれそめ ～パートナーと歩む～

【概要】

夫婦・パートナーのなれそめを集めた本。職場や留学先、旅行先、お見合い、ネットなど、人との出会いは十人十色。どうやって知り合ったのか、どういう経緯でつきあい、結婚まで至ったのか、結婚を決めた理由、一緒にいて苦労したこと、楽しかったこと、幸せだったこと、障害を乗り越えて絆を変えたこと、仲良くいる秘訣、相手の好きなどところ、尊敬できるところ、今後のことなど、国内外、年齢問わずインタビュー記事にする。パートナーを探している人、恋愛している人、結婚しているけど問題を抱えている人などが希望を持ち、幸せになれるハッピーエンドストーリーにする。それと同時に、インタビューされた人が話しながら相手の良いことを改めて思い出し、幸せな気持ちになれば嬉しい。

【想定する読者ターゲット】

- ①20～60代の女性
- ②恋愛・結婚したいけど相手がいない人
- ③恋愛・結婚を躊躇している人
- ④恋愛・結婚したけど問題を抱えている人
- ⑤もう年だと恋愛・結婚を諦めている人

【構成案】

若くて結婚した人

50-60代で結婚した人

再婚した人

同性で結婚した人

見合い結婚した人

国際結婚した人

など、老若男女約 20 人

【サンプル原稿】

「会ったらクリヨウジみたいな人で面白いなと思ったのよ」

敬子さんが初めて徹さんに会った時の第一印象だ。20代後半で知り合ってから一緒に時を過ごし、お互い80を過ぎた。

当初、敬子さんは27歳。東京で美術関係の仕事についていて、まったく結婚する気はなかった。お見合い話は山のようにくるが、全部断っていた。そんなある日、同僚から、良い人がいるから会って見ない？とお誘いが来る。話のネタになるし、会ってみるかとなんとなく思った。

結婚に興味がなかった敬子さんが会う気になったのにはわけがある。二十歳ぐらいの時、友達に連れられて占い師に会いに行ったのだ。占いはまったく信じていなかったが、その時の言葉がよみがえった。

「あなたは結婚できないね。パトロンが2人つく。だけど、銀座線沿線の人から話が来たら、もしかしたら結婚できるかもしれない」

そしてこの話を持ってきたのが、銀座線沿線の人だったのだ。これは面白いと思い、会ってみると、ジョン・レノンのファンだった徹さんは丸メガネにロングヘア、つなぎを着ていた。黒メガネに小太りなクリヨウジに風貌が似ていた。敬子さんの大好きなアニメーション作家だ。サラリーマンタイプが苦手だったので、この人なら面白そうと直感し、つきあうことになる。

敬子さんに会った時の徹さんはバツイチ。結婚したものの単身赴任中に離婚。徹さんは帰国してからも広告関係の仕事が忙しかったので結婚は考えていなかったが、同僚に誘われて敬子さんに会う。そしたら違和感がまったくなく、以前からずっと一緒だったような心地良さを感じ、1か月後に結婚した。ほれたはれたというのもなく、なんとなく一緒にいるのが自然だった。

敬子さんも、お互いこだわらない感じだったのと、だめでもともとなら面白いほうがいいと思い、結婚を決めた。良い会社に入って、出世して…というような平凡な人生ではなく、人と違う生活をしたい、という考えが一致していた。

結婚生活が始まっても、何も変わることはなかった。娘が二人生まれて敬子さんは仕事を辞めたが、徹さんは仕事でほとんど家にいなかった。高度成長期でどの家庭もそんな感じだった。香港で会社を立ち上げ、家族で移住してからもそれは同じで、家族の時間を大切にしつつ、忙しくしていた。

仕事を辞めた後はロングステイ先にタイ・バンコクを選んだ。悠々自適とはいかず、当時、徹さんはうつ病を患っていた。香港で長年経営していた会社をたたむことになり、心身ともに疲れ切っていたのだ。不景気で隣のビルから飛び降りた人が出ると、敬子さんは心配になり、友人に相談。東洋医学やマッサージをしていた人だ。

「体に正常に血が流れていれば心も戻るよね？」と聞くと、そうだとわれ、敬子さんはマッサージを習うことにした。それを名目で徹さんを店に連れて行き、敬子さんのマッサージを受けてもらったのだ。マッサージを続け、だいぶ良くなったものの、バンコクに来た時はまだ目の焦点が合わなかった。回復するまでに1年半ぐらいかかったが、ゴルフに行ったり、DIYをしたりするまでになった。バンコクに来て3年目には以前通り元気になり、昔の同僚から仕事の話も入ってきた。そして単身赴任でタイの違う都市に行き、3年間働いた。

「正直言って、あの3年間がなかったら私たちは危なかったかもしれない」

と敬子さんは笑いながら言う。鬱は治ったものの、24時間一緒にいるのが耐えがなくなっていたのだ。独身時代の理想は結婚ではなくて、「サルトルとボーヴォワール」のような自由な恋愛。会いたい時に会って食事するなど、普段は別々。お互い独立していて、会いたい時だけ会う。お茶飲まない？とか。24時間一緒にでないような結婚ならいいなと思っていた。

そして実際の生活もほとんどそんな感じだった。徹さんの仕事が忙しく、家にいなかったからだ。それがバンコクに来てからはずっと一緒。家は広いので目に入らなくても、ここにいるというだけで、ごはんの支度やおやつを用意とか気をつかう。今まで気楽だったのに、文句まで言われる。今後もこの生活が続くのかとうんざりしていた時の話だった。敬子さんも赴任先へと社長に誘われたが、即座に断った。「亭主は達者で留守が良い」というのをしみじみ感じた。

赴任を終えてからは、敬子さんは絵を習い始めた。パートのように毎日出かけて、絵を描きに行き、半日外で過ごす。そうやって徹さんとの距離感をたもった。徹さんは徹さんで好きなDIYやゴルフをして楽しんだ。その後、敬子さんはケガの後遺症で家で過ごす時間が長くなったが、それぞれに大画面のテレビがあり、チャンネル争いなく平和に過ごしている。

仲良くいる秘訣は、とにかくよく話すということ。思ったことは何でも話し、その場で解決し、尾を引かないこと。言うだけ言って忘れる。時には声が大きくなり、ケンカしているようにみえ、子どもに「ケンカしないで」と言われたこともあるが、本人たちはケンカしているわけではない。

そして、相手に期待しないこと。徹さんは、仲良くなろうと思うと相手に要望が出て、期待するから、がっかりしてしまう。期待しないで自分を鍛えたほうがいい。性格不一致で離婚するという人もいるが、二人は元々性格不一致だったし、それが面白いという。性格がま反対だから、それが魅力になる。徹さんが感じ取れないものを敬子さんが感じ取る。それがまた面白い。

「どうせ横領するなら10億円ぐらいにしてよ。数百万円とかで捕まったら格好悪いから」

香港でビジネスをしていた時、敬子さんはよく言っていた。徹さんはネガティブ、敬子さんはとてもポジティブ。そういう発想が面白いのだ。徹さんは結婚当初、「この人ばかじゃないの」というぐらい明るくてびっくりしたが、それが心地良く、こんな素晴らしい女性はいないと感じる。

敬子さんにとって徹さんの良いところは、こだわらないこと。物事にはこだわるけど、敬子さんに対してはこだわらない。妻はこうあるべきだ、というのが一切ない。

人間なんだから、そういうくだらないことはお互い言わないと。そして、徹さんも同じことを言う。相手が優しい、優しくないなど性格に関しては言わない。だけど、計画とかは別。生活をどうするかとか、そういうのは話し合う。それ以外、相手に要求はせず、お互い好きなことをやっていけばいいというのが二人のスタンスだ。

お互いを尊重し合いながら、好きなことをして五十数年。これからもその関係は変わらないが、敬子さんは最後にこう言って笑った。

「でもさ、結婚しないでパトロンがいた生活のほうが面白い人生を過ごせたんじゃないかなと思うこともあるのよ」

[以上となります。よろしくお願ひいたします]